

《研究ノート》

文学を通して考える自己探求

——機心からの脱却のために——

深 澤 清

はじめに

この研究ノートは文学的な観点から「スマートフォン」に囚われた人間について言及し、そのような人たちの「機心」からの精神的な脱却を促すためのものである。その前提には「スマホ」の画面に意識を奪われ、授業に集中できない学生の姿がある。スマホに代表される SNS ツールを駆使し、ある意味では「機心」となった私たちの精神は、今後どのような方向に向かっていくのであろうか。すべての情報をスマホに依存し、その画面に映し出された〈文字〉情報に心を奪われ、時代に流されていくのであろうか。「ことば」の重み、行間に秘められた著者の想いを探求する、いわば文学的な読み方をする人にとっては、スマホ依存型の人々の生活は何かしら看過できないものがあるはずである。そこで、本稿では現代の状況と過去に対する強烈な批評的分析力をもつ William Shakespeare (1564-1616)、Thomas Carlyle (1795-1881)、そして T.S.Eliot (1888-1965) の作品に触れ、先人の伝統的文学作品の中に前衛的な知恵を借りることで、今後の新しい社会に対応するための術を探ってみたい。初めに「スマホ」が似合いそうもない人物としてシェイクスピアの「ハムレット」、カーライルの「トイフェルズドルク」の2人を、そして「スマホ」が似合いそうな人物として T.S. エリオットの詩作品に登場する現代の人々をとりあげる。

何をみているのか

確かに私たちはスマホの画面を〈みて〉いる。この〈みる〉という文字を漢字に置き換えれば、〈視る〉、〈見る〉、〈観る〉、〈診る〉、〈看る〉、〈覧る〉などがあり、漢字にすると人々がどのような状況におかれ、また何を「みて」いるのかが分かりやすくなる。例えば、自然を〈観察〉すれば様々な法則が〈発見〉され、身体を細胞レベルまで〈視〉れば、病気の原因がわかる。医師は患者を〈診察〉し、看護師は患者を〈看〉る。また、病気治療の事例はインターネット等で広く公表され、人々がこれらを〈覧〉ることで医学の発展につながる。ヒトゲノムの解読もインターネット上で研究成果が公開され、解読時間が大幅に短縮された。このように私たちの生活は〈みる〉行為を通してイメージを言語化し、そこに意味付けを行っていく。

ハムレットの苦悩とは

「ことば、ことば、ことば」——これはシェイクスピアの『ハムレット』(第2幕2場)にある有名な台詞だが、復讐を誓ったデンマークの王子ハムレットは狂気を装い、宰相ポローニアスの「何をお読みですか」(What do you read, my lord?)との質問に対して、次のように答えた。

Hamlet. Words, words, words.

Polonius. What is the matter, my lord?

Hamlet. Between who?

Polonius. I mean, the matter that you read, my lord. (Hamlet 2:2)

ハムレット ことば、ことば、ことば。

ポローニウス いや殿下、その内容で。

ハムレット 誰と誰の間の内容かな。

ポローニウス つまり、何を読んでいらっしゃるのですか。

この場面におけるハムレットの「誰と誰の間の内容か?」(Between who?)という台詞は、観客(読者)にとっては想定外である。なぜなら観客はハムレットが「読んでいる(みている)」のは文字によって書かれた内容、つまり〈文字内容〉であり、それについて言及されるのが自然だと思うからである。ハムレットの返答により、観客が想定していた〈文字内容〉の‘matter’は、人間関係の〈問題〉である‘matter’へとすり替わり、事態はこれまでとは違う方向に展開することが暗示される。すかさずポローニウスは「いや、本の内容で」と問い直すが、時既に遅く観客(読者)は不穏な空気を察知する。

確かに言葉は生きている。例えば私たちが本を読む時にまず目にするのは〈文字〉であり、内容には〈言葉〉によって理解されていく。やがて言葉はまるで台風の目のように周囲のイメージを巻き込みながら意味の重層性を構築する。まさに I.A. Richards の論述通り、言葉は様々な意味を呼び起こす「喚起機能」(evocative function)を持つ。¹⁾

さて、ハムレットの苦悩については様々な議論があるが、仮に「ことば」という切り口で考えてみると興味深い分析が可能である。それは、例えばハムレットは生々流転するこの世を分析し、自己との関係を言語化して理解し、そして事態を把握するのに時間をかけすぎた、という切り口である。真実を探求する過程で言葉が生まれたが、言葉の複雑化によって迷いが生じ、その結果としてハムレットは復讐という殺人行為になかなか踏み込めなかった。これがハムレットの苦悩の原因である。言い換えれば、いち早く殺害というかたちで復讐を実行していれば、ハムレットの苦悩はなかったことになる。

Now might I do it pat, now he is praying;

And now I'll do't. And so he goes to heaven;

And so am I revenged. That would be scann' d: (Hamlet 3:3)

今ならやれるきれいさっぱりと。今あいつは折っているからな。
今おれが殺る。あいつは天国へ行く。
おれは復讐を果たした。いやちょっと変だぞ、もっと考えなきゃ。

心理分析的にハムレットの心境を推し量るならば、例えばメラニー・クライン (Melanie Klein, 1882-1960) が「分裂的」と呼んだ「鏡像段階」に先立つ時期、つまりジャック・ラカン (Jacques Marie Émile Lacan, 1901-1981) のいう「前鏡像段階期」における神経系の未発達な時期には自身と外界との間に差異はない。だが、いずれは鏡の中に自身の像を認め、主体はそれを我がものとして引き受けなければならない時がやってくる。ハムレットの心境もまさにこの時期にあたるのではないか。鏡像段階は同一化の一つだが、人は鏡の中の像を我がものとして内在化するためには、「大文字の他者」において認知の「しるし」を受けなければならない。つまり、父王殺害に対する復讐について言えば、ハムレットは、まず〈他者〉としての〈自分〉を生きなければならなかった。ジャック・ラカン的に言えば、主体の欲望は他者の欲望の対象の中にある。ハムレットは復讐を果たすことが自分の使命だと思っていたが、実はそれは他人のものであることを徐々に感じ始めていた。それ故にハムレットの苦悩は続き、結果的にどうしてもハムレットの独白部分が長くなる。観念論的な表現になるかもしれないが、ハムレットが求めたものは「私」が「私」である以前の意識できないもの、つまり「純粹経験」というものである。感覚するとは、感覚される対象から一方的に印象を受けとることではなく、感覚する者と感覚されるものが相互的な関係にあることを意味する。一言でいえば感覚する者と感覚されるものとの共存である。例えば、木肌のざらつきを見る時、目はその木肌に触れている。木々の表面をたどる私の眼は、木の幹の表面によって触れられている。そこには「存在との原始的な接触」(contact primordial avec l'Être) がある。

有名な 'To be, or not to be: that is the question.' (Hamlet 3:1) というハムレットの台詞の解釈については様々なものがあるが、おそらく最も多い訳は「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ。」となるであろう。他の解釈としては「復讐を果たすべきか、やめるべきか、」というものもある。又はこの部分に前述の考え方をあてはめて解釈すれば、「そういう自分になるべきか、このままでいるべきか」というような訳も可能であろう。日本語訳の選択はともあれ、この場面の中心となるのはハムレットの生き方であり、彼は〈死〉を通して〈生きる〉ことの意味を模索している。それはハムレットの次の言葉にあらわれている。

To sleep: perchance to dream: ay, there's the rub;
For in that sleep of death what dreams may come
When we have shuffled off this mortal coil,
Must give us pause: there's the respect
That makes calamity of so long life; (Hamlet 3:1)

しかし眠れば、多分夢を見るだろう。ああ、ここですまづくのだ。

この人生のしがらみを脱ぎ捨てた時、
死の眠りのなかで、どんな夢が訪れるのか分からない、
これがわれわれを躊躇させているのだ。ここにこそ、
長い不幸な人生を忍んでいる理由があるのだ。

この場面では、ハムレットは自己の存在の原点について様々な思いを巡らせている（“there’s the rub”）。つまり、人の「死」を通して「生きる」意味を問うている。ハムレットの脳裏には、亡父王の復讐を果たす自分が見えていたにちがいない（‘to be’）。復讐を果たして「死」を現実のものとさせるのか、それとも苦悩の「生」を続けるのか。（‘To be, or not to be’）。「死」であっても「生」であっても、人間としての役割の姿、つまり先に引用した台詞の中にある「衣」（“mortal coil”）を脱ぎ捨てた時、本当の自分が現れるのか。ハムレットにとって「死」と「生」の境界にいることこそが、まさに「長い不幸な人生」（“calamity of so long life”）であった。この場面におけるハムレットの言葉は、「自覚」の現れである。自覚とは直観と反省の結びつきであり、〈私〉とは〈反省〉によってその姿を現す。別な表現を使うならば、「潜在的一者」と「顕現的一者」が分かれる以前の姿が意識されている。知性の立場を超えて霊性的自覚へ、そして同時に霊性的自覚の中で知性がまた新しく生かされてくる。ハムレットはそのような暁会、又は 妙会^{めいえ}を感得したのであった。

やがてハムレットは次のような一種の諦観とも言うべき落ち着いた心境を示すようになる。

There’s a divinity that shapes our ends,
Rough – hew them how we will.

(Hamlet 5:3)

結局、最後の仕上げは神がする、つくづく
そう思う、荒削りはいくら人間がしてもだ――

父親である前王の亡霊から、叔父である現王のクローディアスに殺害されたことを聞かされたハムレット。復讐を誓ったとはいえ、「自覚」を通して復讐を果たすことの意味を問い続けた。ハムレットが求めたのは単なる殺害という短絡的なものではなく、むしろ王子として何ができるかという、もっと高次な問題であったはずである。例えば新約聖書には次のような言葉がある。「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」（ローマ人への手紙12:19）この聖書の言葉に従えば、復讐は人がなせる業ではない。ハムレットが抱いていた苦悩とは、単に復讐を果たすことよりも、むしろ神のみ心に従って人としてどのように生きたいのか、ということではなかったか。自己探求の方が、ハムレットにとってはより重要な ‘matter’ であったはずである。

トイフェルズドレクの苦悩

イギリスの評論家・歴史家であるトマス・カーライル Thomas Carlyle (1795-1881) は自伝的著作ともいえる『衣装哲学』*Sartor Resartus* (1836) (原題名は「仕立て直された仕立屋」の意) の中で、人間存在についての懐疑や人生の苦悩について述べている。精神的に成長していく主人公トイフェルズドレク (Teufelsdröckh) はカーライルの分身でもあり、その出生は謎に満ちている。ある時、ドイツの田舎に住む老夫婦の家に突然ある紳士が訪れ、バスケットを置いていく。中には赤ん坊が寝ていたが素性も分からぬままであり、最後には忽然と姿を消してしまう話である。

この主人公トイフェルズドレクは突然この世に連れてこられたので、自分の背後にある慣習や伝統らしきものは現実の〈観察〉の中から把握し、それを人生の糧にするしか方法はなかった。現実を観察する姿は、例えば次のような場面によくあらわれている。

ある日、トイフェルズドレクは家の窓から外界を見下ろし、人々を観察していた。狭い路地裏で編み物をする老女、豪邸で優雅に食事をする人々、物乞いの老兵や食料を積んだ馬車が目に入り、次のような思いを抱くのであった。

well-nigh a million of Ghosts were travelling the streets by his side. Once more I say, sweep away the illusion of Time; compress the threescore years into three minutes: what else was he, what else are we? Are we not Spirits, that are shaped into a body, into an Appearance; and that fade away again into air and Invisibility? This is no metaphor, it is a simple scientific fact: we start out of Nothingness, take figure, and are Apparitions; round us, as round the veriest spectre, is Eternity; and to Eternity minutes are as years and aeons.²⁾

街を忙しく行き来する様々な身分の年齢の人々たちよ、自分たちがどこから来てどこへ行くのか知っているのか。永遠から来て永遠に去るのだ。それは亡霊であり他には何があるというのか。靈魂を目に見えるようにしたもので、身体こそ備えているがやがて空中に消えてなくなるのではないか。そのかたい舗道は感覚の映像にすぎず、人々は実は虚無の胸の上を歩き、空白の時間が前後にあるのだ。

このような光景を目にしながら、トイフェルズドレクは自分自身を省みる時、ふと人間存在に関する孤独感や空虚感に苛まれる。——自分の背後にある精神的な基盤は何であるのか。今ある自分を支えるものはいったい何であるのか。この短い間だけ生きている自分はいったい何者であるのか。——夜も深まり静寂が訪れた時、このような思いにかられて孤独感はさらに強まっていく。トイフェルズドレクが求めていたものは、明らかに自己の精神的な安定をもたらす〈何か〉であった。

やがてトイフェルズドレクは精神的な不安を克服したが、その解決策もまた現実の観察の中から得られるものだった。村の街道を駅馬車が往来して、遠い町や村のたよりをもたらし、また次の町や村へ行く。この村には定期的に市がたち、遠い国から色々な衣装を身につけた商人たちが集まって品物を売買する。少年は人々のにぎわいを耳にすると自身の存在の神秘を感じ、この地上の果て

には今の自分をもたらしただけかがあると思いはじめた。そして遠い世界への憧憬を強めていった。

青年になったトイフェルズドレクは自己に繋がる世界を求め、自己探求のためにヨーロッパ各地へ放浪の旅に出る。そして最後には自然の姿を神の生きた「衣服」として、そこに意味を見出した。人間の存在ははかないが、自然の秘儀を悟り、人は社会に貢献できるとトイフェルズドレクは知ったのであった。

トイフェルズドレクが現実の観察から得たものとは、人々の精神的基盤はその社会が育んできた伝統に存在するという考えである。そしてその伝統を辿り返して最後に行き着いた場所は、人々の心のふるさととも言える原初の世界であった。トイフェルズドレクはそこで永遠なる偉大なもの、超越的な至上の絶対的存在を確信するのであった。

著者カーライルはイギリス社会が機械工業へ移りつつあった時代を憂い、功利主義的な思想が今後勢力を得るようになれば、理想主義の光は消え、神への信仰も失われると考えていたのである。

2人に共通する救いとは

先に述べた通り、苦悩の中にあったハムレットとトイフェルズドレク。この2人に共通する精神的な救いとなったものは、キリスト教の神の存在である。人は言葉を使うからには、どうしても〈伝えられる〉ものと〈伝えられない〉ものがあり、どんなに言葉を尽くしても、相手の心の奥底まで妙薬を浸透させることは難しい。他力では解決できず、結局は自分自身の胸中深くに静かな爆発が起きない限りは得られない真理であった。禅的な表現を使うことが許されるならば、それは「喝」という一文字が的を射る説明となる。例えば禅の講話でよく引用される言葉に、「直指人心^{じきしにんしん}」がある。これは文字通りに解釈すれば「直ちに人の心を指す」となる。つまり人心と仏心は本来別のものではなく、我々の心には元来、仏心が備わっていることを意味する。眼を外に向けるのではなく、自分の心を直につかむことが大切なので「直指」となる。臨終の釈尊は弟子のアーナンダに「自灯明^{じとうみょう}法灯明^{ほうとうみょう}」(自らを灯明とせよ 法を灯明とせよ)と説いたが、これは依頼心を棄て、他人に救いを求める必要のない仏性が自分には具わっていることを自覚せよ、という意味の言葉である。仏教では起業のことを発業と言う。「業」は人間の心の働きを意味するので、発業とは〈ものを始めよう〉、〈事を起こそう〉とする意志をあらわす。仮の命に自己の意識を吹き込んで、生きがいのある命に変えるという意味もある。その命のことを活命^{かつみょう}という。したがって、発業によって活力を得て生き生きとした人生を送ることが可能となる。先述の通り、ハムレットとトイフェルズドレクの場合、この「活命」に相当するものはキリスト教の神の存在であった。

T.S. エリオットの都会の手

T.S.Eliotの4つの短い詩の一つである‘Preludes’（前奏曲）は、1917年に出版された詩集、*Prufrock and Other Observations*の中にあり、これは後の作品 *Four Quartets* のまさに「前奏曲」として位置する作品である。以下に示した‘Preludes’の2つ目の詩は、都会に暮らす人々の朝の出

勤風景が描かれている。都会に暮らす人々の生活はまるで機械のように動いている。

The morning comes to consciousness
Of faint stale smells of beer
From the sawdust-trampled street
With all its muddy feet that press
To early coffee-stands.
With the other masquerades
That time resumes,
One thinks of all the hands
That are raising dingy shades
In a thousand furnished rooms. (‘Preludes’ section II)

朝が来て気づくのは
早朝のコーヒー店に押しかける
大勢の泥だらけの足で踏まれた
おが屑の街から漂う
気の抜けたビールの匂い
時が繰り返せば
また他の仮面舞踏会のことを思い出し
何千という家具付き部屋で
汚れたブラインドを引き上げる
無数の手のことを考える

この詩全体に漂う雰囲気は生気のなさである。都会の安いアパートに住む人々の一日の生活は、ほぼ同時刻にセットされた目覚まし時計で一斉に目を覚まし、「無数の家具付きアパートの部屋」の窓に取り付けられたブラインドを上げることから始まる。無数の手が一斉にブラインドを上げる。窓ガラスに写る無数の手は機械仕掛けのように同時に動き、異様さを放っている。T.S. エリオットは味気ない日常生活を、機械的な S 音のひびきと融合させ、ものうげで無感動な情緒を醸し出している。例えば、consciousness, stale, smells, sawdust, street, press, stands, masquerades 等、そして濁音の S を加えれば、ほぼすべての詩行で S の音が響いている。単にアパートの視覚情報だけではなく、音楽性がこの詩には存在している。つまり〈言葉(意味)〉と〈音楽〉とが融合している。エリオットはボードレール譲りの「日常のありふれたイメージ、大都会の不潔な生活の映像」を詩法として、「ありのままの形で提示するとともに何かそれをより大きなものにかえる」ということを考えていた。³⁾

さて、同じセクションの5行目にある“masquerades”(仮装、仮面舞踏会)という語には、本人の素顔、本性を隠して生活する都会人の姿が織り込まれている。いわゆる〈仮面の生活〉である。エリオットがこの詩で描いた20世紀初頭の都会の状況は、あながち21世紀の時代も変わらない。

だからこの「仮面舞踏会」という言葉を「インターネット」という語に置き換えるだけで、現代の諸問題が浮き彫りにされる。例えば情報源が明確ではない〈情報の信憑性〉、〈匿名性の悪用〉などの社会問題がある。そしてその先には人々の〈ネット依存〉という問題が発生してくる。このように、エリオットの言葉は今の時代にも生き続けている。都市生活の腐敗は機械文明によってもたらされ、その荒廃は単にヨーロッパだけに留まらない。人々の頭は無感動な「うつろな人」になっている。次の詩はエリオットの詩 ‘The Hollow Men’⁴⁾ からの引用である。

We are the hollow men
We are the stuffed men
Leaning together
Headpiece filled with straw. Alas! (‘The Hollow Men’ : I)

俺たちはうつろな人間
俺たちは詰め物をされた人間
お互いにもたれながら
頭部は藁だらけ。ああ！

「うつろな人」は、嬉しくても顔がひきつり、笑っている表情でもどこか目が笑っていない、いわば「仮面舞踏会」に参加している人の表情をもつ。そんな人の頭の中身は想像力が欠如した空洞なうつろ状態。その無感覚な部分は藁くずで埋められ塞がれているが、それでも自分はそのことに気づかずに毎日の生活を送っている。「うつろな人」の活動が個人の範囲にあるうちはまだいいが、厄介なのは無感覚な頭で空疎な言葉を並べたて、それを他人に無理やり押しつけることにある（‘Leaning together / Headpiece filled with straw’）。無感覚な「うつろな人」は、たとえこの世の終わりが来たとしても、そのことには気づかない。ある意味では無感覚だからこそストレスもなく、この世の終わりまで生き延びることができるかもしれない。この詩の最後には以下のような部分がある。

For Thine is
Life is
For Thine is the (‘The Hollow Man’ : V)

主のもののなれば
人生は
主のもののなれば

この詩行は意図的に特定部分が省略されているので、一見すると意味がとりにくい。省略されている部分を加えると、For Thine is (the kingdom) / Life is (very long) / For Thine is the (kingdom) となり、主への祈りのエピローグとして一般的に用いられる、“And lead us not into temptation,

but deliver us from evil: For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever. Amen". という言葉が裏打ちされている。⁵⁾ 無感覚な「うつろな人」にも神の救いは与えられ、「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」(マタイ 6:13) という祈りの言葉が行間に響き渡る。たとえどんなに「うつろな人」であっても、キリスト教の神の愛はすべての人たちに平等に注がれている。それが「うつろな人」の唯一の救いである。逆に言えば、「うつろな人」であるからこそ、まだ将来の希望があるとも考えられる。

命の尊さを「みる」—「機心」からの解放

これまで、シェイクスピアの「ハムレット」、カーライルの「トイフェルズドルク」、そして T.S. エリオットの作品で描かれている「都会人」について述べてきた。ハムレットとトイフェルズドルクに共通する生き方には一つの美学がある。それは飽くなき自己探求である。2人は「死」を通して「生きる」ことの意味を追求し、その過程でキリスト教の神の御心に触れた。「生」は「命」の尊さを知る契機となり、自分に与えられた人生を神の国に至るまでより充実したものにしようとする探究心が芽生える。より充実した生き方を求めれば必然的にそこには苦悩が存在し、悩みや苦しみは続いていく。逆に言えば何も考えず、無感覚な人には、苦しみは存在しないことになる。それは T.S. エリオットの「都会人」の楽観的な日常生活にあらわれている。

我が国においては、毎日、「人身事故」が原因で電車の運行が停止している。私たちの感覚は既に麻痺しているかもしれないが、時が経てば何事もなかったかのように動き出す電車と人々の日常生活。まるでキャンセル連絡で宿泊名簿から名前が消されるように、簡単にこの世から人の名前(生命)が消される現実がある。一瞬、時が止まったかのような感覚の後、人の死の重みを感じる間もなく、経済活動が動き出す。私たちの感覚はまさにエリオットが描いた「うつろな人」状態である。「うつろな人」は、ハムレットやトイフェルズドルクが抱いたような苦悩には関心を示すことはないであろうし、また、「命」という目にはみえないものを「みる」気持ちは抱かないであろう。

目には見えないものの中で、最も大切なものは「^{いのち}生命の尊さ」である。これは単に人間だけに限定されるのではなく、植物、動物、そして我々が住むこの地球 (globe) を含め、すべての存在に対する崇拜の念である。つまり、これは「自然の中の私」、そして「私の中の自然」を意識することであり、自然を見つめる私は、逆に自然からも同様に見つめられことを意味する。このような意識の交互作用がなければ、人はものごとを自己中心的に考え、自然を破壊し続けることになる。

アニミズム (animism) とは、日本語で「汎霊説」、「精霊信仰」などと訳されるが、これは山や水、樹木や巨石、雨や風にも神性を認める考え方であり、イギリスの人類学者 E・B・タイラー (Edward Burnett Tylor (1832-1917) がこの言葉の提唱者とされている。森羅万象に神をみる人間の自然崇拜的な感情について述べた彼の著書 *Primitive Culture* (1871) は、進化論的文化論として後の思想に大きな影響を与えた。

日本人にとって、「アニミズム」という言葉はとても馴染みやすいはずである。例えば「^{また}複草木ことごとくに能く^{ものいふこと}言語有り。」(『日本書紀』)とか、「語問ひし^{いわねきねたち}磐根樹立 草の^{かきは}片葉をも^{ことや}語止めて」(『古事記』)とかの表現に示されているように、記紀や歌謡では、草や木や岩などが言葉を発して人々

との会話が成立している。

アニミズムの *anima* とは〈氣息〉や〈靈魂〉を意味するラテン語であり、靈的存在 *spiritual beings* (靈魂, 神靈, 精靈, 生靈, 祖靈など) への信仰を意味する。また、この派生語にはアニメーション (*animation*) があり、モノに生氣を与えることを意味する。人間の感情をモノとして扱う考え方、つまり機械論的、合理的な見方をする人にとっては、自然の中に神性を見出し、自然崇拜的な自然観を持つことは難しいかもしれない。一神教のもとでは全知全能の神がこの世界にあるすべてのモノを支配し、それ以外の精霊や神々は邪神 (*pagan*) として追い払われるが、それでもその基層部分にはアニミズムの考えが色濃く出ている。アニミズムは人間靈魂の観念を人間以外の諸存在にも認め、それらと密接にかかわろうとする営為である。

日本人はこれまで村落にある清らかな河川、大きな岩や荘厳な滝、そして大木などに神聖性を見出し、祭祀や礼拝の対象としてきたが、逆にそれは人々が本来持っているイマジネーション (想像力) の豊かさを示すのではないだろうか。「超自然的 (*supernatural*)」なものは、通常人にとっては不可視の存在なので「靈的 (*spiritual*)」とされ、また「超人間的存在 (*superhuman beings*)」は人間と同じように喜怒哀楽の心意を持つと考えられ、人格化 (*personification*) される。18世紀の 아일랜드 の聖職者 George Berkeley (ジョージ・バークリー) は、この世界に本質的に存在するのは心的なものだけであり、物質的なものはそこから派生した見せかけの存在にすぎないとする、「観念論」または「唯心論」を唱えている。

私たちは「スマホ」依存型の生活から完全に脱却することは無理かもしれないが、少なくとも詩的想像の世界を描く心的活動、想像力を高める活動を日常の中にとり入れる必要があるであろう。そうすれば私たちは自然からのメッセージを受けとり、それを言葉によって「みたてる」ことができるはずである。「みたてる」ことは「意味するもの＝能記 (*シニフィアン signifiant*)」と「意味されるもの＝所記 (*シニフィエ signifié*)」の関係、および言語活動と密接な繋がりがある。「ことば」を手段として、私たちは「みたて遊び」と同じように「いま・ここにない」ことを想起することができ、詩的想像の世界を飛躍的に拡大することができる。このような精神活動があれば、人から「何を読んでいるのか」と問われた時、「言葉」とだけ返答することはなく、書かれている「内容」について言及する人を育成できるであろう。今まさに、「機心」からの脱却を学生に促す時ではなからうか。

注

- 1) *The Meaning of Meaning: A Study of the Influence of Language Upon Thought and of the Science of Symbolism* (C. K. Ogden, I. A. Richards Published by Routledge & Kegan Paul (London) 1956.) p.150
- 2) *Sartor Resartus*, by Thomas Carlyle, online at www.gutenberg.org. The Project Gutenberg EBook Chapter VIII. NATURAL SUPERNATURALISM.
- 3) T.S. Eliot, *Selected Essays 1917-1932* (New York: Harcourt Brace and Co, 1932.) p.341.
- 4) エリオット自身の説明によれば、この *The Hollow Man* とは William Morris の小説 *The Hollow Land* と Rudyard Kipling の詩 'The Broken Man' の題名を結合したものである。
- 5) *Matthew* 6:13 "And lead us not into temptation, but deliver us from the evil one." そして、わたしたちを誘惑に陥らせないで、邪悪な者から救い出してください。